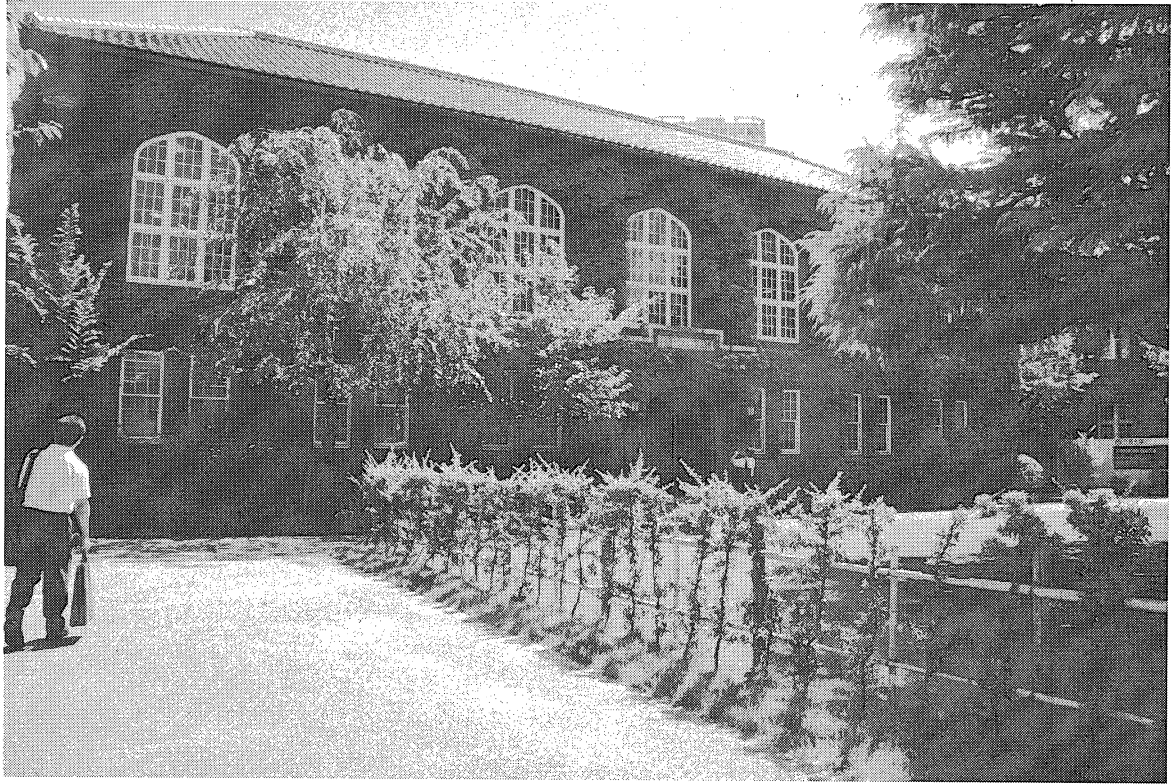


1 1. 立教学院史資料センターへの訪問調査



立教学院史資料センターのある図書館本館・旧館（メーザー・ライブラリー）、1918年竣工

基本データ：

開設年月日：2000年12月1日

所在地：東京都豊島区西池袋3-34-1（池袋キャンパス）

HPアドレス：http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/rikkyo_history/

刊行物：定期刊行物：『立教学院史研究』

その他：『ミッション・スクールと戦争』（老川慶喜・前田一男編）、

『立教大学の歴史』、『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成（抄訳付）』

（立教学院150年史資料集）など

専任職員：事務職員1名（課長）、学術調査員2名ほか

調査日 2011年8月30日

場所 立教大学 立教学院史資料センター

お話しいただいた方

立教学院史資料センター研究員（文学部助教） 豊田雅幸氏

調査者 酒匂康裕（メモ）、富岡勝
増田大三（写真）

1. 「貴学における大学アーカイヴズについて」

1-1 設置目的・設置経緯 ——大学史研究を重視した組織——

立教学院史資料センターは、学校法人立教学院全体の歴史を取り扱う機関として、2000年12月1日に設置された。

この学院史資料センターの設置にむけた動きは、『立教学院百二十五年史』編纂業務が2000年3月で終了することから本格化した。法人事務局内ではなく、大学内に設置されることとなったのは、学院史に関する資料の収集・整理・保存の活動だけでなく積極的な研究活動にも重点が置かれたためである。

研究活動にも重点が置かれたことは、同センター規程の第2条で「センターは、立教学院の歴史および学院関係者の事績に関する資料の収集・保存、調査・研究などを通じて、本学院の発展に資することを目的とする」と定められたことからわかる。



保存処理された明治期の建物図面

1-2 組織形態 ——専任事務職員と学術調査員が実質的中心——

同センターの組織は、「センター長」「副センター長」「運営委員」「研究員」「学術調査員」「事務局」から構成されている。

運営委員は、大学より5名、池袋中学校・高等学校より1名、新座中学校・高等学校より1名、小学校1名、学院本部1名、センター長が特に指名する者若干名から構成されている。「センター長が特に指名する者」には、校友（同窓生）も含まれる。

研究員は、立教学院の教職教員のなかから選ばれる場合と学院外から選ばれる場合との両方がある。

学術調査員は、研究に従事する教員系統の常勤ポストで、1年契約（最長5年間まで）で2名配置されている。

ほかに、「文学部助教」「立教企画契約社員」「丸善契約社員」、アルバイトなど様々な形態でスタッフの充実が図られている。

事務局には、専任職員1名として課長職が配置されている。

1-3 活動内容——学院と戦争に関する研究プロジェクトも——

センターの活動内容（業務内容）は、以下の5点が規程で定められている。

- (1) 資料の収集、整理および保存
- (2) 調査・研究およびその成果の発表
- (3) 展示会、講演会、公開講座等の開催
- (4) 資料の公開およびレファレンスサービス
- (5) 学院内における立教史の教育に関する業務

資料の収集、整理および保存と研究の両方に力点を置いているのが特徴である。

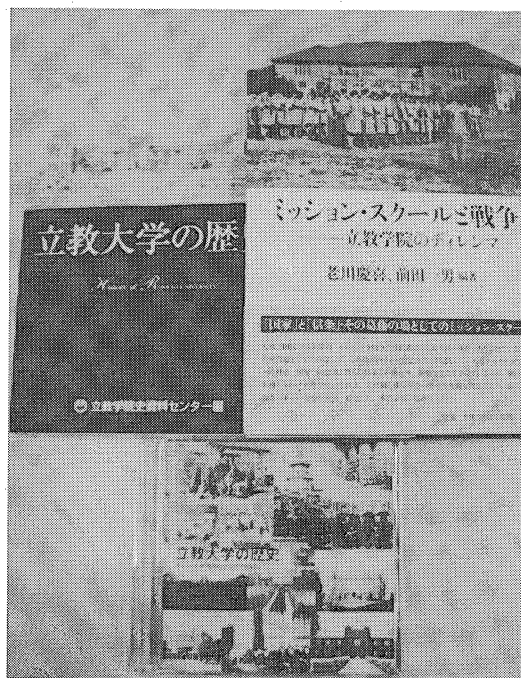
資料の保存では、各部署に資料の保存を呼びかけ、センターから資料をもらいに行っている。一般的に、個人情報保護の関係で資料を廃棄することが懸念されるため、各部署の職員に資料保存の必要性を認知してもらえるように努めている。また、近年においては、歴史的な建築図面をはじめ、資料の保存・デジタルデータ化にも力を入れている。

図書館本館・旧館1階にセンター事務局があるが、同じフロアに2室の資料保管室を設け、さらに近年新築された「学院事務棟」地下にも資料保管スペースを有している。

研究活動としては、研究紀要を年一回発行するとともに、学内外の研究者による「研究プロジェクト」も実行している。研究プロジェクトには、「立教学院と戦争に関する基礎的研究」

(2001年から)、「立教築地時代の研究」(2003年度から)、「遠山郁三日誌研究会」(2008年から)、「立教中学校関係資料研究」(2010年から)などがある。科研費も利用して、老川慶喜・前田一男編著『ミッション・スクールと戦争—立教学院のディレンマ』(東信堂 2008年)などの研究書も刊行している。

展示では、130年周年(2004年)と135周年(2009年)に大きな展示を行なった。毎年



出版物(自校史教育テキスト、研究書、CD-ROM)

10月のホームカミングデーにもパネル展示を行っている。常設展示場の必要性が学内でも認知されてきており、今後2~3年内にできる可能性がある。

資料の閲覧は、センターに連絡すれば可能。「立教大学の歴史」の授業を受講した学生がレポート作成のために資料を閲覧しに来る場合もある。

センターの業務に教育が加えられたのは、2002年度からである。全学共通カリキュラムの教養教育科目として「立教大学の歴史」という自校史の授業をセンターの研究員が担当している。また、研究プロジェクトの成果を還元する意味から「立教学院と戦争」という授業がセンターの研究員複数名の担当で開講されている。

また、2024年に創立150周年を迎えるため、年史編纂の準備も視野に入れつつある。

2. 「貴学にとっての大学アーカイブズの意義」について

立教学院はアメリカ聖公会から始まっているにも関わらず、キリスト教主義を戦争時に捨てたという歴史があり、そのことを含め、戦時下の動向を検証していくことの重要性が学院全体の課題になったという経緯があった。学院史資料センターの設置には、そうした背景もあり、大学のマイナス面も検証して調査・研究の成果を公表するという立教学院にとって重要な取り組みを行うために、研究機能を含めた同センターの業務の意義がある。

3. 「国公立大学・私立大学における大学アーカイブズの意義」について

国立大学は法律が後押しとなって大学アーカイブズが動くという面があるが、私立大学の大学アーカイブズは、大学の歴史を検証して、自らのアイデンティティの確立に寄与するという面に意義がある。私立大学の大学アーカイブズは、単なる自学のアピール以外にも役割は色々ある。とくに、みずからの歴史を検証していく義務がある。

調査を振り返って

立教学院史資料センターは、負の側面を含めた「大学の歴史の検証」という社会的な意義を有する研究活動に重点的に取り組んでおり、同時にその取り組みが学院全体で認知されているということが特徴であろう。研究面を重視した大学アーカイブズとしては、今回の訪問調査先では、明治大学と並んで典型的な事例であろう。

近畿大学で大学アーカイブズをつくる際に研究機能にどの程度力を入れるのか、ということは検討課題であるが、負の側面もしっかり検証していくことに大学として意義を認めるということは、実は大学の社会的な存在意義をアピールすることにもつながっていくのだ、ということに改めて気がついた。

(富岡勝)